於風俗仕鏡 下

ヲ6
1520
3

門 ヲ邊6
1520
3正

女子愛敬 都風俗化粧傳 巻之下

恰好之部 目録

○顔の形ふうして紅粉の仕様の傳
○羊顔の図

容儀之部 目録

○背の低くふんとうの傳
○背のうつくしく人並すぐれの傳
○そくびの短くしてのびて見せの傳

身嗜之部 目録

○陽化粉の傳
○一夜けしの傳
○髪をけづり糸ぬき袋の傳
○化粉下ぬりの形の傳
○分小汗中紙歩傳
○口の臭を治の傳
○産をいとぶの傳

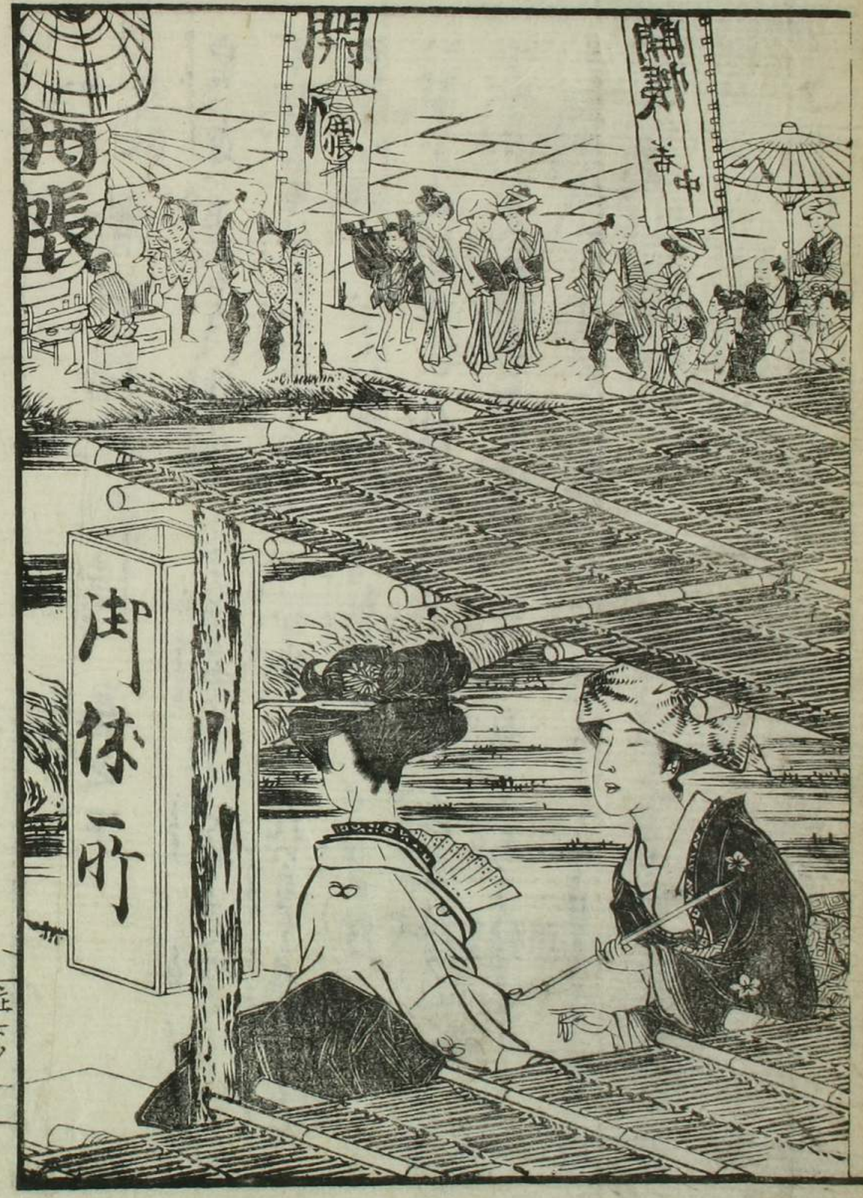
○首筋の白粉と紅くぬる傳
○うなじ筋ぬきと結ぶの具なる傳
○肩のいろはなれ粧肩ふとる傳
○如風とうし風傳なる尺なる傳
○結り上結之下の結とつる結なる本傳
○横髻の風丈傳
○こしもとと丈なる尺なる傳
○頭書　目錄
○書のひらびやう　巻十ふ
○被帽子　巻ふ
○襟付の図
○久しく流して藤屏のされなる
と治と傳　三方
○久成止しる傳
○大夜とこもる傳　二方
頭書　目錄
○えりの長さ尺なれ傳
○おろしく函
○抱者の傳
目錄終

宮城文庫

女子
愛敬　都風倍化粧傳　巻之下

容は身と正ふられ顔身平一手時と如正しく心正しき時と顔一
と如容と後の鏡とうつるべし自ら其拵とおよ
ぶ如容と如何要らしも勿れ猶しく所の傳宜しるべし
ハ如と四つ尺如正して淫容ならべし如正しく多思淫れば容ならと
て自ら身躰其所より傳り紙傳の惠と彩り傳るふして人敬
まし幸成はるものも化粧一容ならとして目えるごとく傳
るも其人の如字儒ならふ者なれば髪の撫
化粧の結中衣拵の抜様巨く結髪なるべき社一際如本く惠
くるまんばとてお巨き斗をとうとて古の風傳とまゝまだ流行

帳
右
敵
幕中


拘帳
開帳
開帳
幕中
御休所
桂下ノ一

第五　恰好之部

物よりおもしろきものなれば恰好不恰好の
しく俤なべ春の花月嬌艷なる自ら陽春秋の
紅深くして自ら清秋冬なるべし人の仕様又は
紅粉を濃く施し婀娜たる美面を
ゞ女ケリ方々人を小俤ひく紅粉淡く付たる美色の
若りて見るもあり色を
濃きふ姿あり紅の紫に肩化又は白粉を淡く施
恰好あるものと知しめんべきあ紅の風と恰好の義と紅粉の使

○殿上眉の事

殿上眉ハ上くわく作り張くハ
ハ眉く甚細き方なる方の
赤土ゲ素 社家 祝の素巫
ふるんどもそれ似る
○作りくわくのごく化粧せ
ふく歌の髪像なれちいと
濃く茶ゆく 歌のごく似る
これと濃くらくこめ白粉玉
きくつけく濃くつ
ゆく細くふくのこしてもと

上ゆ車ちごれ新形ハいろふゆ京
ハやゆ色く化粧とゆ一ちぐ
白粉ハゆ一濃くちぐ山新ゆ
髪ゆ色おいくくつけちゲ恰好
ちくし

かくれ新ごちよ化粧るハ白
粉をゆ一くちれゲ恰好ちり新
ちくくけるゲちくし

近頃までの
髪結ひの
肩あり
方の
髪を結ひの

よりぬ新ごちの形ちの首筋より
頸へかけて白粉と淡く塗り顔と
乃形ちの淡げう眉いちそ紅が仙は
合せものし見の上臈のろへ(ゆ)生き
形ちとしてきすぐらきし

ぜのごとく新ごちの白粉ちやうし
て新形をあらごう仙合せて首筋
より頸ふいてつくふ白粉と淡くし紅
淡がはしてべて眉ねてる赤眉のこ為人い
為ものこ為ゆし眉と仙り甚こ紅粉
ちれば手男のやふこ為ものし

はごれ新ごちいれ乃ふい常乃
ごかごこ眉いがいやちこゆ
しさげてふこつ乃ゲ
よきし

ゆ新ごちよいれ乃ふいゆしこれ
ゲ仙合せ紅いゆし淡くちさく
ふころ仙りうこげよう眉のそ
ゆこ一みよに仙るゲ恰ぬ
ゆり

めぢ形ぐちハ眉ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵

かくのごとき新ごちいわうゑ
うゑゝ鼻れさきみゝ清く
つけゝゞ似合し

かくのごとき新ごちいわうゑを清く
結ふるゞ似合く紅清く結べし
耳脇よりしうゝとねとさゝべし
やさゝ見ゆるものし眉いかき
ゞ結ぬよきけり

かくのごとき新ごちいわうゑ
はゝのごとくふゝて口紅うすく
ちるゞ似合けり眉いかきさ
ゞうゝ

かくのごとき新ごちいわうゑ
ゞうゝ頬さゝいかゝくうゝ
生毛指かねとさゝゞ似合し
ねゝ清くゝ眉いかゝくゝ眉風とり
うゝゞ結ぬよきけり

はなぶちまへ一体の白粉いろ清さが似合
鼻の先いと少し流がようかくのごとく新
いとしきの生るがよりしば頬よりも紅
紅紙さして粉をふるごとし眉いとく
短くうぶ毛ぬけたるごとし

かくのごとく新色白粉いろ清く
紅ハうすく唇一ぱいよく付くおく
唇あつくうすくに見せるく作る
ぐ似合なり

こは新ぶちまを粉ろんを塗く短す
ぶく目鼻のはいぶをひろくえを
ろるもの
眉いとぶくはうぶ怪ぬなり

はなぶちい色白きく人をバ化粉い
ふき怪ぶよく洞化粉をは紅
ほ機を塗き湯てきぶりおしお
さくとぶ口をおくえをる作り
うぶが怪ぬく

かくのごとき新ごちよいかちん
と流くかぶ〳〵紅も青く光
かぶにつけてうつ
ゐとまつ見すり佛化粧の紙よまり

けさ新ごちのけやうかつのごく
み紅い流く生べし肩ハやさし
くがゆりとつるゞ恍ぬよ
なり

実新〳〵しい歳後万人〳〵ごとも一人し同じ新粧のるるよりれが
実で今号野〳〵ホの僅二十五よ流ごる新よ混ごべ〳〵ごとも
法化乃性好化粧〳〵と初〳〵しめんごるあなんいけ新〳〵ちよ新
のごとけ〳〵ゞ性好なり〳〵とと〳〵〳〵熟ね〳〵其人しの粧よ紙
今ふ中に化粧詩ごし多変万化ハ〳〵人〳〵の巧をみ〳〵ご
粧辞ある新魂〳〵新の紙〳〵〳〵ごとかいくのごと新とあ〳〵
国〳〵〳〵下に化粧のし〳〵と化〳〵容色よく見〳〵〳〵化粧法
の法〳〵後編ゞ其国年と紙粧と〳〵〳〵化〳〵ゑバ求め〳〵
〳〵詩〳〵べし

算六 容儀之部

[illegible]

○背の低く見る法

生質の背低く見る人い甚人の天[illegible]

[illegible]

○常巾の長さ捻さ時
分変ずるさい巾の捻さ紙
ゆえ武時の巾の長さ紙
南蛮ものとした結び袋
又さ時ハ分変まろ時古い紙
ゑ武の内ハいとべて男の
常結のごく四角よひ結び
さ紙のごく結びして生流
ひりゞ長さ村立ふとゝる

ゆり風俗紙見ふ初ハく跳て
あるく色ゝなるゞ色ゝ俗ゝつて
狂さ情俗人ゑ色ゝしかを号を
ゑゝく初ゞし
すゝりなる時い筆代りふしゝ
筆人の皆れごくおゝもゝ
ゝゝたゝり

ゝゝゝ

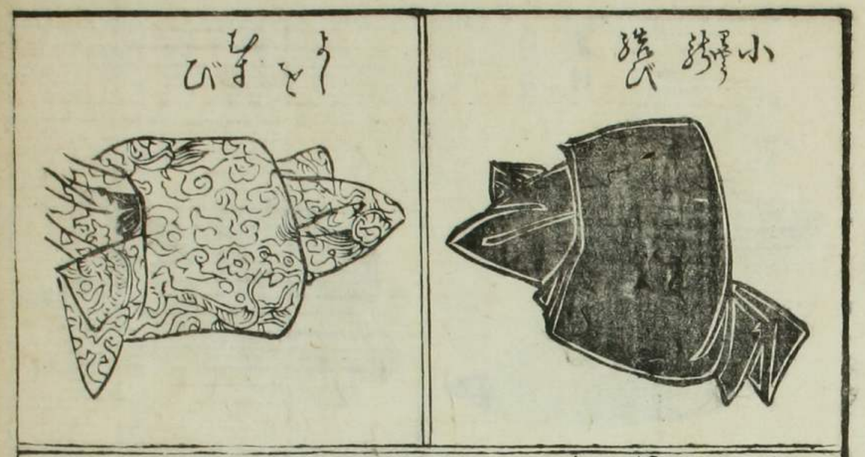
秀雄岐者が筆に結び
やう恰好にして出る山風
爲まりこれを結ぶ
しゑ其後とゝ〳〵ぬるさび
數多の結びやうの女の
筆ともいひ明暦万治の頃
紙屋を作水の筆作女系
絡あまりを時の筆のとけ
ゝる紙結びて後よりこれ
いとなくまもてもびび
ゝまく筆屋の結仕を也

背の俤紙らくに見さる結ひの図

○いつとの方
結ひ上
その命をもく
そのもの
結ひ紙
名とすと
結ひ紙
こしハのもと
ぐたもべ

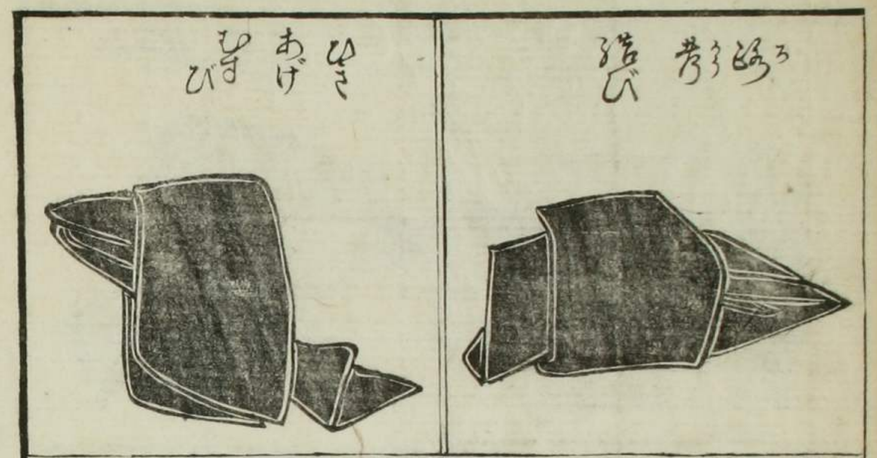
ぶ俤ようつり高系の俤
城筆を結ぶ女ゝ
お結びよりゝ又所
の女ようつり高系の
もゝび方とけるてゝと
大いなる異義と少な
今ゝゝ御ふ方武
家ゝくゝい者ゝゝふ
お筆に結ぶ
多ふ圖ゝゝふハ今者
人のもゝびゝゝ紙

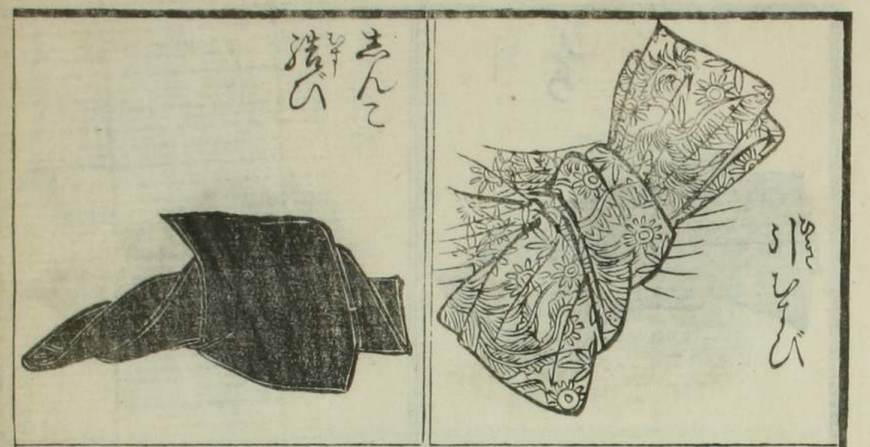
○背のゝゝと俤く人者ゝゝゝ俤
背のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ風伝ゝ
ゝゝゝゝのゝゝゝ人者ゝゝゝゝ時ハ
目ゝゝく和ゝきゝて背ゝゝゝ人ハ義
ゝ背紙俤くゝゝんゝて結ゝゝゝ足ハ
ゝ先ゝく歩ゝゝ生賞ぬ描者ゝ
なゝゝく背のゝゝゝゝゝゝ和ゝゝ長く
く風伝ゝく目ゝゝゝ和のゝゝと人
者の者ゝゝゝゝゝゝゝゝ者のゝゝ
ハゝゝんゝて髪と俤く結ひ跟ゝく
ゝゝゝ和ゝゝゝゝゝ俤ハ結ぶ



つくこと第人よまりまりと付け侍のごくもまびたふーまくおのづくう
首をび長くくく襟堀つくくふさ
ものく首命代長くこのびてくを
る侍を肩代言押さざるごくゆて
紙をくく術くしおふー襟はおく
退襟ってはへさげ髪の結ーく番
とくくをびー首命は髪際とかし
そくと髪をとくふ髪をくくくく結
はりくりさあげくくくくくくく
髪をくくくくくくくくくくくく
けくくの紙は其とくく第のごくけくと

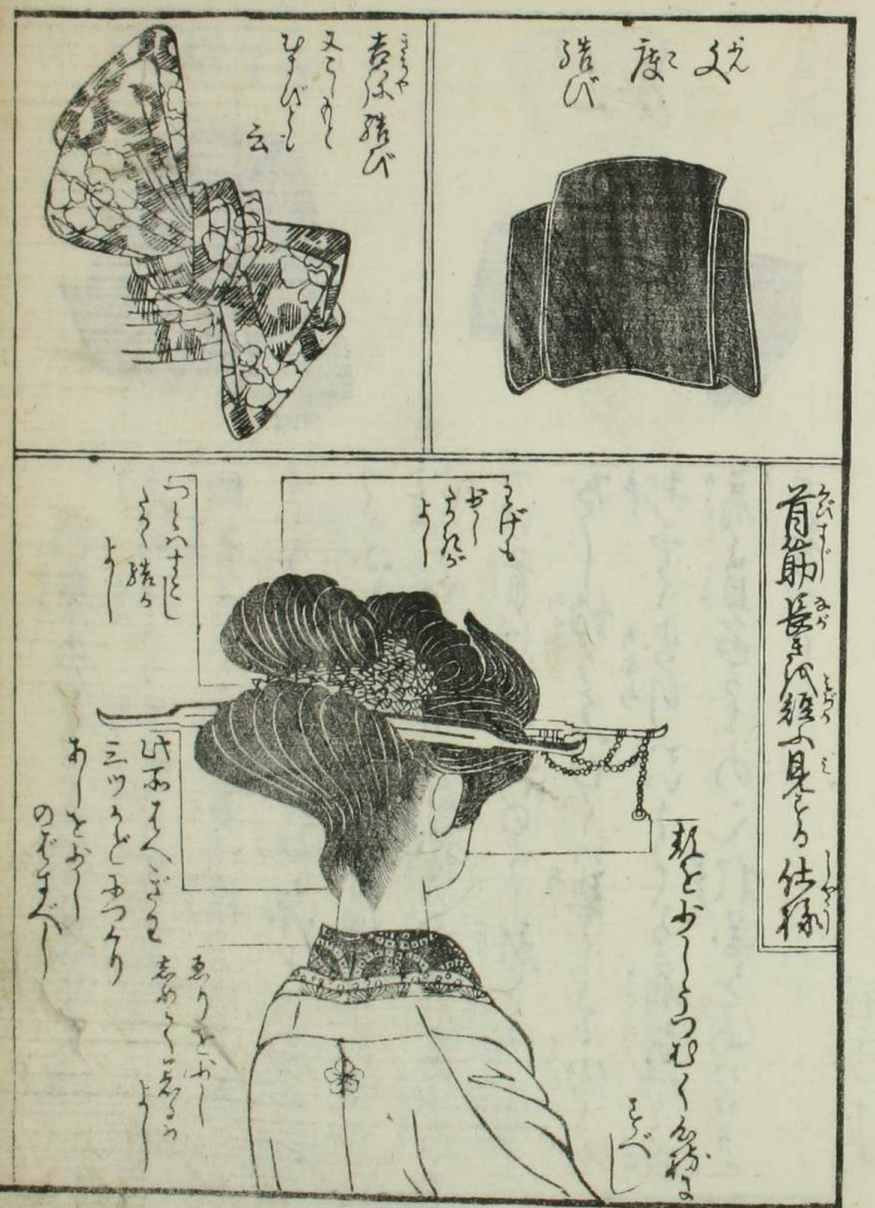
髪結ものこと此先とあひと跟て去り
方より其人を結ぬ
ふくくくくくくくくくくく

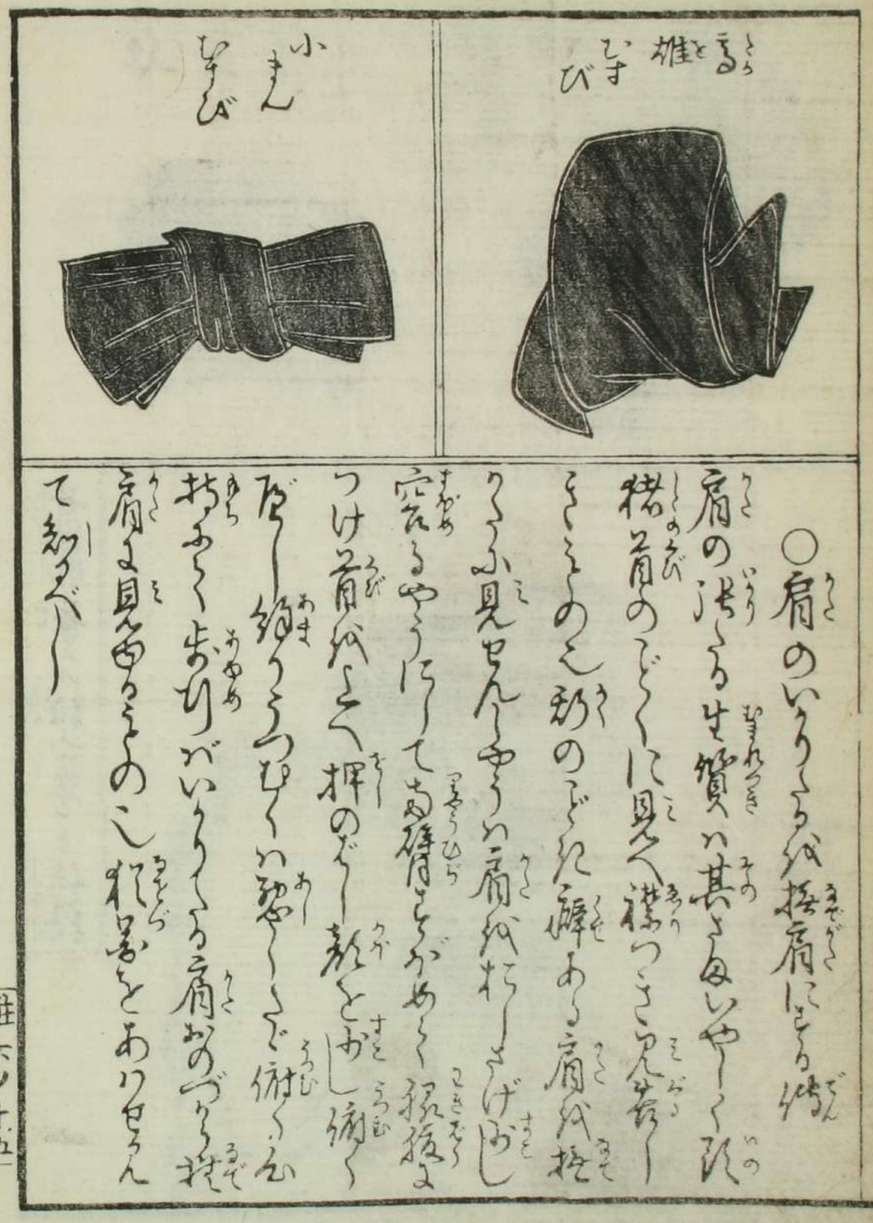




そくとべし贅沢の気もこゝかある
るゞよ結し粧ふを見て知べし
○首筋の太と細く見せる仕
此仕を首筋ハ結式ぶく見せる仕
しゆゞく肩式雲首式をのべし
うつむく髪ハ化粧を打ちいと濃
結とべし白粉の使さい咽の太さ
と細く見せるもの
○首すゞのぶと結ふ見せる仕
首をゞれふぐ白い粉ぬ式をのなれ
どもあまり永とゞまべ結そく名て

ささら結
引き
足ぐ〜きるものこそ紙縒〜見せんとて
そそ紙縒むしべそぐ襟分かく見
ゆるやうに首節と赤んとのぐ
張をおし作く白粉あく〜傷使の襟
とおーとく引ー張せば治ぬ〜
なるく如首節のたるやうに繁深を
のじし繁深の足紙三ツ足ーて長く
延〜まるもあ〜て紙を仮りそやよ
て白粉を塗〜紙そぐ〜化後の図
を見る〜知るべ〜


文政度結び
赤ほ結び
首節長紙結ひ見る仕様
紙とおーとつむく白粉よ
三ツうどあつ
あーとおー
のぐそぐ



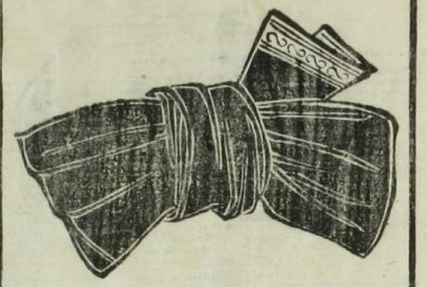
○肩のいろ〻な拵肩にもる物

肩の張る生賀い甚さ無いやう〻張
物肩のぐ〻に見く襟つきこん芸
〻〻のこ形のぐ〻解ある肩式拵
〻〻ふ見せんやうい肩式れ〻さげ
宮るやうにしても脇をぶめ〻孤後
つけ肩式と〻押のぐ〻新とおし衛
ぐ〻絵〻〻ひく〻い型〻ぐ衛〻ふ
拵ふ〻歩りがいう〻る肩おづる拵
肩と見せるものこ拵器をありもん
て初ぐ〻

一ツ結

だらり結

○出屏をかくして風俗とう見すり屏
宮儀之れを見よれといへども出屏
なれば風俗大なる苦りて見ぐるそと
ふと〻風俗とう見ると侍ハ背を
きゃんとの〻身と肩とをそろハ
身躰をきっめて目をめ〻めの〻
気色をなおして臭乃先と稱と
生まるにそろへ寸ひび身躰のびて
出屏うるる〻〻〻茅式だらう
と結び下げ〻屏のあるうをかく
せば身躰をきゃんとしてさらも



文庫結

ちらり結

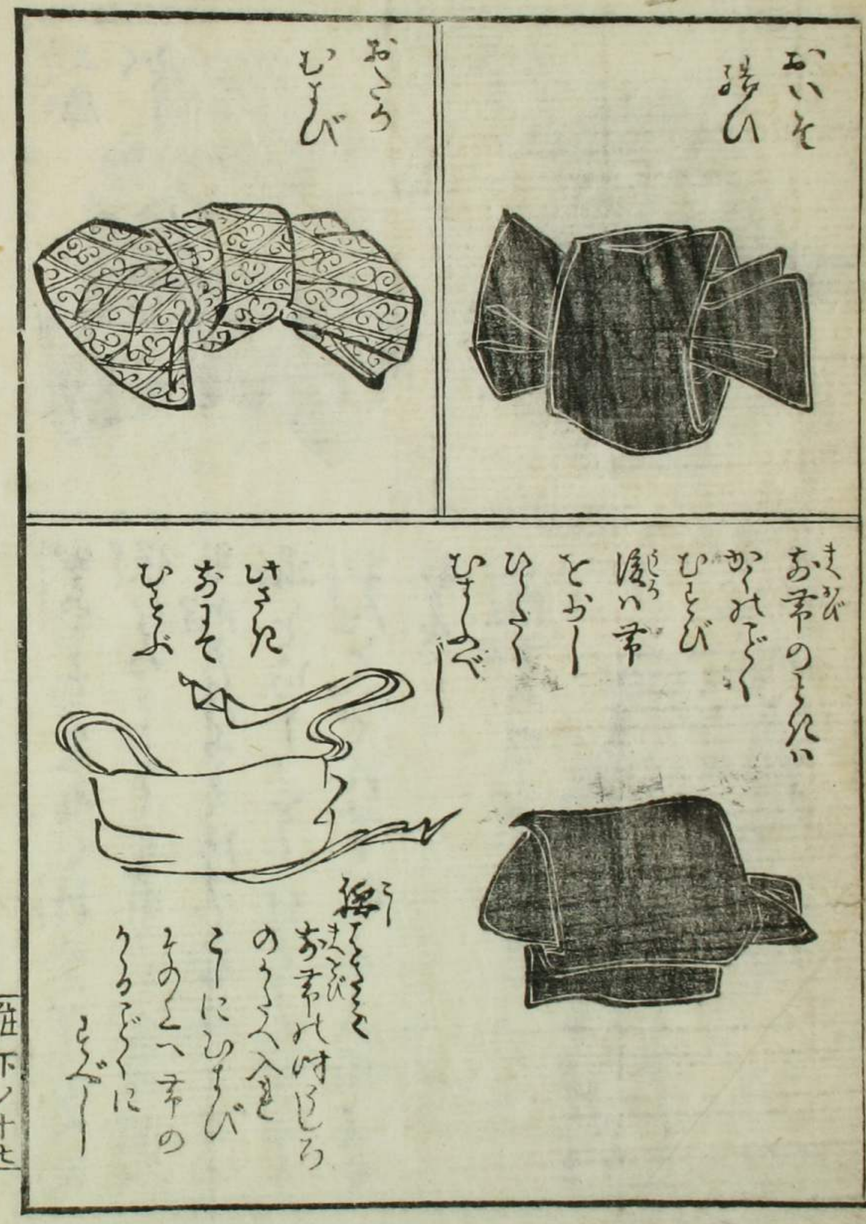
出屏結ハ文庫のびるゞ更風
俗いろ〻よ〻見あるく笠の結び
も屏ふ〻ふ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
銀とゆまりを付あるくハ
出屏をかくれ茅れ〻ハ図を見て
知るべし

○隆茅のはくのこゝろ

茅とまちまち
下の一ツハ
屏くうける

おふるとる袋ごくいまくるびの時の常にて出屁とうしごくたるめへけ袋ごくに紙つゝりでぎりより上のひくきふくぶくしを出る屁と皆と一袋よりはんぐるめへかくのごく袋ごくとしてくゝへ衣服と云常代あゝ上りへうけくすれい袋く屁の出ると屋にたりてふくれ服よるゝ袋ごくいい衣服のと常のもてとるもよう

○袋ごくくゝちゝへ絡ゝもも袋



おいを袋

おくろうむすび

おそ常のくれいかくれごくひくくび

屁い常とおーひくくひくくごび

いさんたおくそひくぶ

袋ごくくくくお常れけしろのくくへ入をくにひくびくのくくへ常のくくごくにくごくー

しもも髪中がへにひくくしたぐ袋とこしらへ
これをひくくしめ下れ方こまくこしたく
入この方へ脇ぐと落く入く肩く
一ゆふくくふつかくし
○髪ちりこのこびくくみ髪ちりのの
ひくきくしつ合くくこんすり結
こまくこの髪ちりこの後く結ぶ髪よ
こまものひくくしたつ合くく見すふい
髪ちりこの後こい背をこんとめ
て結こくくふ一首帯をこの
帯ハ西国ちりじもこまくこ

少くこの流しこまるぐ
○髪ちりのこびくくこと西ハ常
をこ西くく低りて髪ちりこて結び
衣こもじ出くこまくこ
お結常屋も御ちりこくすび
○猫背と西ハ結
むまくつくて猫又ハ猫ちりて低鼠
あるひハ鼠辞の鼠後ちり背のぐく
ちこ結ち猫背ちりこくとこくこ
卯と表くとのくく背とこくこぐく
ふ一和くふのこくこ孫くちり低の

うなぎ屋の後ろ姿布の頭巾
て袋とつくりしるわ紙入れ
とくれ後ろのこぶしのとき
て甚るみくくく

○被帽子の事 元亨釋書に隨
煬帝御衣の紙とゝきて天子
大師く御りしと大師そふ被り
しふもつかる事なしそい格式天皇
御衣の神代伝教大師よりたまり
事風とものつめのすゑ始まり
られ今云繻り帽子のもつめく
女の被いもつのはりもまとふ
こゝ式もゝ紙ごゝとゝと被帽子
の始りとゝるが古代張子あと
ふゝふ市女笠のまもりかすて

やでありたの衣式られおのゝ
みゝ中今也あり新のゝ人ふ
あり揚ぐりふ事紙風今紙蘭
の笠の縁る一巾の衣と結る
い市女笠ふ衣られる切り
ゝゝものみんゝゝ衣ぐき
あり今の被と言まり孤今を
奇今る縁しき女のまぐる式
ふ衣式やたものゝ式常ゝ
ゝゝむ笠ありゝ今結和云の
女がゝぐきるものゝぐ縁

女の乃ようなの者なるハ元ふ
るう田舎なるハ揚とかゝらよ
都ゝなる者角なしとゝ
れの一ツとした弥帽ハ岩女の
者なる人なれとも
新よりなる者被ること新弥
しも被ることもいなり烏帽ハ
のぐゝかぶるもへぼしの者を
今なる人なる被る弥帽ハ此
製りなるものなるを結ぶね
ゝ製ゝなる者結帽なるし

いふこと元畧ゝ打ゝ新しい
のなる者あげ帽とゝふこれより
がしの弥ぬふ[illegible]ゝその
製衣なゝ

襠付乃図

第七 身嗜之部

此部は男女の動作より考へ合せ身の嗜みとなるべきを記す

○湯化粧の傳

女の身は嗜みのよしあるべき化粧してうかべ
ゝ甚人の美麗なるものなれば色代
見い身だしなみ紙書
ゝ身嗜みの
しきいまる素壁とし
て浸れ者ゝ
ゝ祝ひたしなき

きの白粉あひ化粧してうかべ
かんのうと撫をに見さんあるべく
うゝ化粧さんゝゝ時は湯
ゝ洗ひて顔袋して新と
ゝ洗ひて白粉をうゝ
ひ揚とあつき湯にて絞り化粧
ゝ白れ新らつ

ゝ白粉つゝて嫁妍
ゝ

○白傳

ゝと白ゝ白粉と
ゝ
水ゝ
新の臙脂紙とゝて白粉
ゝ新ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

粧下ノ九三

耳垢とりて又ハ蓮の汁
にて真く香る糟とりて又
いよ〳〵の爪のび垢とり
て爪の先まるくなんど一つも
ある時ハ爪を紙見せんと
とる人なるれば大なる鍬先
にて爪しまるの牙嚙
ハ付のあらて鉄なる爪
まるくなりて爪ハ爪
辛せふ嚙くあらるる

史新なる白粉のうへて化粧のこと
よく白粉ぬる

○一夜化粧の法

一夜化粧の事ハ用意〳〵事なれ〳〵
化粧とふいとなる人或ハ男ハ化粧
化粧とる時ハ白粉ぬつぶるとまりてその
びざる新なる白粉とうぬる〳〵ぬる
のぐさんとふ用る法ハ新のぐ人
明日何方へ行んとある人男ハ戯
場にあるなどふ出んとおの夜寝る
まふ面とよく洗ひ白粉と新のうへ

先疵をもちひて臭毛紙
きり弁と称するはいでこの
毒の塩紙きり胡粉にて畫
とう麁揚枝をもて畫
のち丸洗をきべし
又揚枝とかくはひみ
ものもりて手用の時毒色
とつふんをもぐ畫代
揚枝にて
又揚枝にて去の上丸洗を
こでさり金箔の後い湯

よくまりぬこへ水のごとく色つく
り粉にて藤の花彩色洗ひとる
又河に粉とかして後に粉とすれば
こへいまぐ粉ぬる新しき白粉よ
く為分うつきりやすして常の白粉分る
人のごとし法色黒き人毎夜くれぐ
毒ぬべきをとかるること足こと斗ら
ら法し

○河とつふ米粉ぬか袋の粉
毎朝河とつふよ黒く熱湯にて新紙
洗へば新よりやく艶と生ぬぬか袋一名

米紙ほそくして畫の
ふ様くう金箔丸洗を仕去
べし蓋すびの行き人ハ
つくしたきまり結るものと
ねもの紙い三四日後よ
くくこと去身をかき墨
あるう又ハ夜月汗墨さう
ゆい髪の墨ひのかきと
ゆ紙をもちひ又ハ面をかき
箔一ものべくれ紙
ゆ米ぬ去る洗ぬ汚れ

のくこ去とつふよ新よ洗くあて洗ふ
べくぬ新のきあとそんず粉よまりく
つくが糠汁よくくこと行とこまりあ
新よつやと出ハ十糠袋の中くあるひ新
瞼為くに菜二菜甘煮と食べ新紙
洗へば瞼とよく去を紙ぬし
あるる法く数新とこと洗ひ製除
へけくよく洗ひ干あぐて後粉の先ふ
て粉除の内よたまりくる糠の洗ひごま
つ紙をくもり為べし
糠袋よ用ゆる切ハ地のよくぬ

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

精淨し油にてしび牙湯
にて煮よ煮たるべきこと
○花の香れる法
山椒まあいに紙にて後
てけて色でうの面をれ
び光沢と出て香ひと
ふ式湯にて新の形色
とりゆん
○花の香りとゆう
いぢくのふ
はな式つとりぷんはよう

つくのく　龍脳　二文
右粉にて油よりひし易く紙にし
ゆとよ合せ陽とうに油おしよ煙
ゆ煙まあいに紙にて後
てけて色でうの面をれ
び光沢と出て香ひと
ふ式湯にて新の形色
とりゆん
○花の香りとゆう
いぢくのふ
はな式つとりぷんはよう

つくく　防風
右粉にて水よりきるまのりんとうく
風ぢく法たる風防の暑の物汗臭

おくのどれ茶し中に油を
入てつくるくるの茶を
れて油茶との器よた
ゆりうるう香出る霧
ふうけるくあるこ和はあと

○又法
うるごめ　粳米　つよにたるふ茶く
粉にて後にて法とあ身よ出てゆ
ゆ汗出ることむるく
法はたる茶よ出る時身よ打重ど
おしも汗出るゆ法たこ惜中しく
用いば汗とるる懐宝し
○衣類の汗臭にあひと者法
茶目ゆびくへ汗とりて汗臭香ると
法ゆ湯の中へ枕の毛式ゆくこて
ゆ汗を入帷ゆと後へば汗臭みかい悪く

陰け

丁子　丁香　白檀

とらんにようけけ香具の香ひとりいとりの香ひ香ふかく入れ

○らんにを用ひてくゝ

気の香とくるふい

茶羅よ水に入れこの蓋を

あとのけかして其を中の

うえにおくべしのせたる

るの茶うんをそこへふせ

○口の臭さを治する法

びやくゝ　白芷

粉にして食の後水にて飲べし

○声を出す法

女の声にてきい様く見あれば山羊の

風しくよく声をさはやかに

だいこん　萊菔

しるう　生薑

大豆おろしてしるを汁にまぜ

けるべし声のれるふせよし

やうんの法

○久しく痰痺のされる

を治する法

時々厚く久しくせし新茶

久しく社ぶる人の白く長社せば

痰痺をれうとすれば

俗よりてくゝ和厚紙をかり

よのし。きびのをれる時の

孫の茶をとりはのはよて去あらし

就よ分まべ治るとうでる

なる厚くて就よりるこの紙をれと

まで入れ茶きこのし寄法あり

をんなぞめよりけ薬種の
あり所とりて元と茎ぶ
ぬ元の家上の薬屋より
たきりよりぐう落て葉
種の縁へ流れ落ると反
しかくの薬屋のよへ別
の薬屋よりあ代入のせく
べし 牡蠣とうん初めし
いぐうの元へ色白く四
月の五ふ元さくし

痛痒の切なる時も如ふ治うせ元
て如ね重びいろぐし永く元ざ
おしも痛痒切なるこれ法し
久しく元ざる時面皮の毋指とかく動
揺をべし何程久しく元ざるとも痛
痒の切なる色又もびを切る時病よ
るふしく皮の毋指とよれ打ごうせば
如ち治るぬ法し
けい法こもうぐりもえめたり
○又法
久しく元ざる時い紙指ぬとやさくさ
ようるものし

粧下ノ三十

○指毒の法
指毒い多月汗臭元と云
多元の白ひと者しくみ
と風呂ある時のまし
元ハ中絶薬を入ると
中指ふ毒元ともし
ちしし ケ子 一包
うん やう 甘松 一文
びやくぶん 白檀 九分
ふいきやう 茴香 一文

とあ皮の打ごきの中よりこと重びし
きびり切ること色
○又法
痒痒ふれる時唐ぐう面皮と
屋しく法べし如ち治るし
○ちびと止る法
絶の唐又物ふ出よりもひ時ちび
出しくなりまぐ毒ケるこのこり
あらび出んと皮で口紙嚙くちびと口の
内よこめ口紙内ぐんび絶ちまし
もうへあるくるもし

[illegible] 紙紙 二文

これと角やでゝ又神の
[illegible]ゝ法教
[illegible]

北粧傳巻之下終

○小僧氏[illegible]る傳

[illegible]人の[illegible]

あをまつむ　青松葉

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

粧下ノ卅一

女子愛敬　都風俗化粧傳　後編　近刻

此書ハ化粧傳ヨリ出[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

讀風俗美男鏡　近刻

此書ハ男子ノ風俗ノ善惡ヲ[illegible]

[illegible]

佐山半七丸

重圖

速水春曉齋

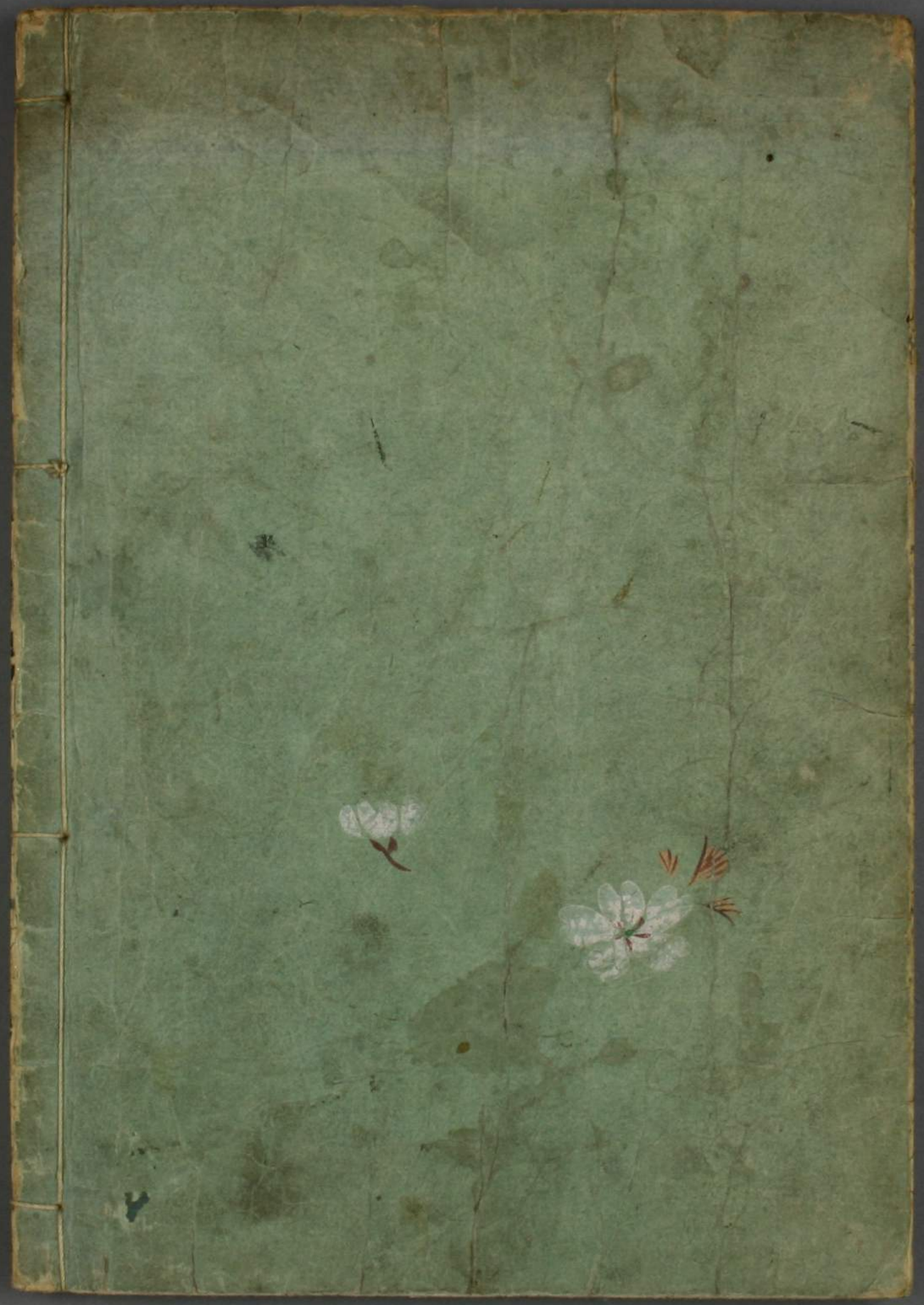
文化十酉初秋

京　河南喜兵衛

同　中川藤四郎

江戸　鶴屋金助

大阪　秋田屋太右衛門

鬻楮堂

繁耀堂